

# 漢語における促音の生成音韻論による説明

沼 野 治 郎

## 促音について

日本語は、基本的に子音と母音の組み合わせ CV からなっている開音節性の言語であるが、子音が  $C_1C_2$  と連続して、閉音節を形成する場合がある。このとき2番目の子音  $C_2$  が有声であるか否かによって、初めの子音  $C_1$  が撥音になるか促音になるかが決まる。

例. maNmaru – maQsikaku  
maNnaka – maQsugu (N は撥音, Q は促音を表わす)

これは日本語の音用論が有声子音の連続をゆるさないからである<sup>1)</sup>。このように撥音と促音は共通した環境に現われ、大変よく似ており、相対し、相補う関係にある。

「つまる音」とも呼ばれる伝統的な用語「促音」の実体は、声に出せない音というわけで、その把握は容易でない<sup>2)</sup>。促音を含む語を発音して観察してみると、口の形（調音点）が後続の子音を発音する形になっていて、一種の緊張を伴って、一音節分の長さだけ無音で持続する状態ということが出来る。例. 圧迫 [appaku]。これは、後続の子音が p, t, k の場合で、s, ʃ の場合は無音ではなく、促音の部分から [s, ʃ] の音が出ている。そこで促音は、p, t, k が続く場合「語中に起こる一音節分の無音状態<sup>3)</sup>」と定義できようが、摩擦音 s, ʃ が続く場合を含めるため、「母音の停止のあとに、空気の流れを

注1) 橋本萬太郎「音韻の体系と構造」、大野晋・柴田武編「音韻」岩波講座日本語 5, 岩波書店, 1977年, pp. 21, 22, 23, 24。上の例も。

2) 小松英雄「日本語の音韻」中央公論社, 昭和56年, p. 186。

3) 同上書, p. 190。

止めようとして生じる緊張を伴って続く一音節分の子音」ととらえることができる。

城生佰太郎は、N, Qに加えて、J, R（「相生」を/aJ-sjoR/と表したときのJ, R）を含めた音素を、さらに細かく、次の表1のように分析している。

表1 日本語の音韻構造（東京方言）<sup>4)</sup>

C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>	V	C <sub>3</sub>	C <sub>4</sub>
ptck				
bdzg	j	iu	J	Q
--sh	w	ea o	R	N
mnr-				
自立モーラ			附属モーラ	附属モーラ

- 例. V /o/ 尾 C<sub>1</sub> VC<sub>3</sub>C<sub>4</sub> /soRQ/ そうっ(と)  
 C<sub>2</sub>V /jo/ 世 C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>V C<sub>4</sub> /zjuN/ 順  
 C<sub>1</sub> V C<sub>4</sub> /soN/ 損 C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>VC<sub>3</sub>C<sub>4</sub> /bjuRQ/ ビューツ(と)

城生は、上記の音韻構造（シラビームと呼んでいる。シラビームとは、音節と同じく、音声連続中に存在する、あるまとまりを捕捉して得た分節 [segment] の単位）において、NとQが一定してC<sub>4</sub>の位置に現われ、常に逆行同化を受けて子音的である点に共通の構造的特徴が認められ、単独ではシラビームを構成し得ないが、モーラを構成し得る点も共通している<sup>5)</sup>、と記述している。たとえば次のような例をあげている。「シラビームのレベルでは『日本』『相生』はそれぞれ /niQ-pon/、/aJ-sjoR/ と2単位に分節されるが、東京方言などでは、これらをさらにある特定の契機間における

4) 城生佰太郎「現代日本語の音韻」、大野晋・柴田武編、前掲書、p. 114。

5) 同上書、p. 120。

等時間的なリズム単位のレベルで / ni-Q-po-N / , / a-J-sjo-R / のように4単位に分析することもできる。<sup>6)</sup> これは適確にして明晰な分析であると思う。

さて、撥音も促音も本来日本語には存在しなかったといわれている。CVという音節構造とは異なった新しい音韻が生じたわけで、音便形におけるこの音韻変化が生じた理由について、馬淵和夫は、日本語が単音節、2音節の語形から多音節語形へ、また音韻論単位が単語から文節へと発達するにつれ、すべての音節を正確に発音する必要がなくなったため、中間の音が略して発音されるようになったもので、漢語の影響は必ずしも直接的ではない、と述べている<sup>7)</sup>。これに対し小松は次のように説明する。音便は、発音の便宜のために生じたとして簡単に片づけることはできない。例を「聞きて」>「聞いて」としてみると、動詞連用形「聞き」と接続助詞「て」の2つの語が、不可分の関係になり、境界が消滅してひとまとまりのものとして機能するとき、融合していることを示す指標が必要となった。音便はそのための手段である、という<sup>8)</sup>。

この撥音と促音の発生と定着という、音韻変化については、しかし、漢字音の影響を考えなければならない。「音韻変化には、内部的要因に基づく自然的変化と、外部的要因に基づく飛躍的变化が考えられるが、…音韻の発達に関するものは、後者が多い<sup>9)</sup>」からである。漢字音の鼻音から撥音が<sup>10)</sup>、入声音から促音が生じた相関性が濃厚である。奥村は、「撥音便や促音便と漢字音との直接的相関性は難問題」であるとしながらも、「和語的な撥音・促音の成立期が、漢字音の受容よりやや後れた頃と見なされる」ことは見逃

6) 同上書, p. 115.

7) 馬淵和夫「国語音韻論」笠間書院, 昭和46年, pp. 91, 92.

8) 小松英雄, 前掲書, pp. 163, 164, 168.

9) 奥村三雄「古代の音韻」, 中田祝夫編「音韻史・文字史」講座国語史2, 大修館書店, 昭和47年, p. 70.

10) 劉富華著, 沼野治郎訳「鼻音 n, ng と撥音『ん』の関係から見た中国語の日本語に対する影響」, 徳山大学論叢, 第28号。

せない<sup>11)</sup>、と述べて、漢字の影響の可能性を認めている。

この小論の目的は、促音でも漢字本来の字音で読まれる現代の漢語を対象に、生成音韻論で音韻変化を説明しようと試みることである。先学たちの論文、著書が既に数多く先行しているが、現代の漢字の熟語に絞って網羅的に取り上げる点が拙論の特徴である。

### 資料

熟語は3字以上からなっても促音は生じるが、便宜的に2字からなる漢語を取り上げる。促音を含む漢語を、ここでは次のように分類する。以下の資料において、左側の//は基底の音韻表示を表わし、矢印の右側の[ ]は、表層構造の音声を表わす。

A1a	復活	/ huku + katu /	→	[ hukkatu ]
	白骨	/ haku + kotu /	→	[ hakkotu ]
	即決	/ soku + ketu /	→	[ sokketu ]
	学校	/ gaku + ko: /	→	[ gakko: ]
	特権	/ toku + ken /	→	[ tokken ]

このグループを一般化すると次のように表わすことができる。

<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">CV + kɿ</span>	+	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">kV + CV</span>	→	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">CVkkVCV</span>
は く		こ っ		は っ こ っ

その他の例…復帰、白虎、学期、学会、特価、楽器、画期的、悪漢、百機、薄幸、卓球、築港、宅急便、着工、着艦、弱冠、肉桂、錯覚、脚光、薬局。

1b	六拍	/ roku + haku /	→	[ roppaku ]
	六本	/ roku + hon /	→	[ roppon ]
	百発	/ hyaku + hatu /	→	[ hyappatu ]

11) 奥村, 前掲書, p. 234。

北方 / hoku + ho: / → [hoppo:]

独歩 / doku + ho / → [doppo]

一般化すれば次のようになる。

CV + k $\ddot{x}$	+	hV + CV	→	CV $\underline{pp}$ V $\underline{CV}$
ろ く		は く		ろ っ ぱ く

その他の例…六方, 六法, 六発, 六腑, 六白, 六票, 六匹, 百本, 百票, 百匹, 百般, 百方, 北氷洋, 独法。

2 的確 / teki + kaku / → [tekkaku]

敵国 / teki + koku / → [tekkoku]

↘ [tekikoku]

石鹼 / seki + ken / → [sekken]

液化 / eki + ka / → [ekka]

↘ [ekika]

激化 } / geki + ka / → [gekka]

劇化 } ↘ [gekika]

このグループを一般化すると次のようになる。

CV + k $\ddot{x}$	+	kV + CV	→	CV $\underline{kk}$ V $\underline{CV}$
て き		か く		て っ か く

このグループはA1のグループに比べると、必ずしも促音にならないものもある(例 敷金)。

その他の例…適格, 適確, 摘記, 適機, 敵騎, 識見, 石膏, 石灰, 石碗, 石棺, 石器, 石窟, 激昂, 腋下, 赤化, 赤禍, 積極, 席卷, 斥候。

B1a 匹敵 / hitu<sup>12)</sup> + teki / → [hitteki]

---

12) hiki は慣用音で、漢音は hitu であるので後者を基底の音にとる。

別格	/ betu + kaku /	→ [bekkaku]
活気	/ katu + ki /	→ [kakki]
脱線	/ datu + sen /	→ [dassen]
圧縮	/ atu <sup>13)</sup> + syuku /	→ [assyuku]

このグループを一般化して表わすと次のようになる。

CV + tʃ	+	CV + CV	→	CVCCVCV
ひ つ		て き		ひ っ て き

その他の例…筆跡, 必着, 畢竟, 逼<sup>14)</sup>塞, 別室, 別世界, 蔑視, 喝采, 滑走, 褐色, 脱出, 脱却, 脱退, 圧死, 圧倒, 結核菌, 逸機, 物質, 仏教, 鉄管。

1 b	達筆	/ tatu + hitu /	→ [tappitu]
	逼迫	/ hitu <sup>14)</sup> + haku /	→ [hippaku]
	圧迫	/ atu + haku /	→ [appaku]
	閱兵	/ etu + hei /	→ [eppei]
	別嬪	/ betu + hin /	→ [beppin]

一般化すれば次のとおりである。

CV + tʃ	+	hV + CV	→	CVppVCV
た つ		ひ つ		た っ び つ

その他の例…別報, 別府, 別品, 闊歩, 月報, 失敗, 実費, 発布, 発破, 抜本的, 罰杯, 鉄砲, 鉄板, 鉄筆, 逸品, 撤廃, 撤兵, 末筆, 末法, 執筆。

2 a	日赤	/ niti + seki /	→ [nisseki]
	一喝	/ iti + katu /	→ [ikkatu]

13) アツは慣用音。漢音, 呉音はアフである。アフあるいはオウの読みの熟語は今日見当たらないのでここに含める。

14) ただし, 「逼」をヒツと読むのは慣用音。漢音はヒョク, 呉音はヒキ。

質素 /siti + so/ → [sisso]

吉兆 /kiti + tʃo:/ → [kittʃo:]

拮抗 /kiti + ko:/ → [kikko:]

一般化すると次のようになる。

CV + ʃ	+	CV + CV	→	CVCCVCV
に ち		せ き		にっせき

その他の例…日刊, 日課, 日食, 日直, 日展, 日当, 一家, 一回, 一画, 一貫, 一騎, 吉凶, 吉祥, 吉辰, 吉左右, 八相, 八挺, 八專, 八寸, 拮据。

2b 八匹 /hati + hiki/ → [happiki]

日本<sup>15)</sup> /niti + hon/ → [nippon]

七宝 /siti + ho:/ → [sippo:]

吉報 /kiti + ho:/ → [kippo:]

一発 /iti + hatu/ → [ippatu]

一般化すると次のようになる。

CV + ʃ	+	CV + CV	→	CVppVCV
は ち		ひ き		はっぴき

その他の例…八八, 八方, 八本, 日比, 一遍, 一斑, 一杯, 一敗, 一服, 一分, 一變, 一步, 一方, 一本, 一夫一婦, 一派, 一泊, 一般, 一筆。

Ca 納得 /nap + toku/ → [nattoku]

合戦 /kap + sen/ → [kassen]

甲冑 /kap + tʃu:/ → [kattʃu:]

入声 /nip + syo:/ → [nissyo:]

十戒 /dʒip + kai/ → [dʒikkai]

一般化すると次のようになる。

15) nihon の読み方もあるが, その読み方が生じる前は nitpon, 更にその前は nzitpon であった。小松英雄, 前掲書, pp. 204, 205。

$$\boxed{\text{CV} + \text{P}} + \boxed{\text{CV} + \text{CV}} \longrightarrow \boxed{\text{CVCCVCV}}$$

な (ふ)                      と      く                      な   と   く

その他の例…<sup>なっしょ</sup>納所, <sup>なっ豆</sup>納豆, <sup>なっ唱</sup>合唱, <sup>なっ宿</sup>合宿, <sup>なっ点</sup>合点, <sup>なっ衆国</sup>合衆国, <sup>なっし</sup>甲子, <sup>なっこん</sup>入魂, <sup>なっ十</sup>十干,  
<sup>なっ指</sup>十指, <sup>なっ手</sup>十手, <sup>なっ徳</sup>十徳, <sup>なっ中八九</sup>十中八九, <sup>なっ進法</sup>十進法, <sup>なっと</sup>法度, <sup>なっけ</sup>法華, <sup>なっしゅ</sup>法主, <sup>なったい</sup>法体。

- b  恰幅 / kap + huku / → [kappuku]  
 合評 / gap + hyo: / → [gappyo:]  
 十方 / dʒip + ho: / → [dʒippo:]  
 答拜 / tap + hai / → [tappai]  
 法被 / hap + hi / → [happi]

一般化すると次のようになる。

$$\boxed{\text{CV} + \text{P}} + \boxed{\text{CV} + \text{CV}} \longrightarrow \boxed{\text{CVppVCV}}$$

か (ふ)                      ふ      く                      か   っ   ぶ   く

その他の例…合本, 合併。

このCグループの前の漢字の読みは、今日ノウ, コウ, ニュウ, ジュウであるが、これはそれぞれナフ, カフ, ニフ, ジフからきていて、中国語の入声音 nap, kap, nip<sup>16)</sup>, dʒip<sup>16)</sup>に逆のぼるので、この元の形を基底の音にした。

上にあげた漢字以外にも、-pで終る入声の漢字には、葉, 帖, 洽, 狎, 業, 乏, 臘, 插, 怯, 狷, 頰, 給, 習があるが、これらが先行する熟語で、促音を含むものは見当たらない。しかも、このCグループにあげた例も多くはかなり昔に逆のぼるものである。これは今日長音に発音されるようになっているため、次の音を発音するのに何の苦労も要しないので、他のグループのように促音に発音した方が言いやすいということにならないからであろう。例外は「十」と「合」である。「十」はしかし、今日「ジュウ」という音をそのまま留めて、「ジュッカイ」というふうには、変形されて読まれる方が多

16) 厳密には、niɒp, dʒiɒp, と ɒ の音が入るが、簡略化して表わした。藤堂明保編「学研漢和大辞典」学習研究社, 昭和52年, 入, 十の項。



くなっているようである。「合」はコウ（カフ）が漢音，呉音であるが，慣用音のゴウ（ガフ）から，今日の促音を含んだ読みの多くが生じている。

以上で，ごく例外的な少数の例<sup>17)</sup>を除いて，促音を含む字音読みの漢語を，幾つかのグループに分けて全部網羅したが，促音の生じる条件と位置を観察すると次のことがいえる。(1)前の漢字，すなわち促音を含むことになる漢字は2音節でなければならない。(2)濁音や母音，すなわち有声音の前には生じないで，無声子音の前に生じる。しかし，前の漢字の韻を調べてみると全部入声である点で共通していることがわかる。この条件は(1)の条件を含んでしまう。入声の漢字は，その読みが行われていた当時の漢字では1音節でも，日本語の読みで必ず2音節になるからである。ただ入声でない漢字から促音が生じる例（牛車<sup>ぎゅしゃ</sup>。「牛」は入声ではない）もあるので，(1)の条件は残しておいてさしつかえない。そのような場合を除けば，漢語における促音は，一言でいえば，入声の漢字が後続の漢字の無声の頭子音によって，元の入声の特徴を発揮して，逆行同化を受けながら閉音節に読まれ，つまる音になる音韻現象ということができよう。

### 音韻規則の適用

以上の資料で，日本語における漢語の促音を網羅しているが，これらの促音が生じる現象を，次の5つの音韻規則で説明することができる。

$$\text{規則 1 } \left\{ \begin{array}{l} i \\ u \end{array} \right\} \longrightarrow \phi / (C)VK \_ + K$$

規則 1' u  $\longrightarrow \phi / (C)VK \_ + h$  ただし前の漢字が「六，百，北，独」の場合。

$$\text{規則 1'' } \left\{ \begin{array}{l} i \\ u \end{array} \right\} \longrightarrow \phi / (C)Vt \_ + C [-\text{voice}]$$

17) 徳利（強意），河童（<sup>かっぱ</sup>当て字）等。

規則 2  $\begin{Bmatrix} k \\ t \\ p \end{Bmatrix} C[-voice] \rightarrow 22$   
           1 2

規則 3  $h \rightarrow p / \left[ \begin{smallmatrix} h \\ \_ \\ h \end{smallmatrix} \right]$

これを資料に適用すると、次の表 2 のようになる。

表 2 音韻規則の適用

A 1 a 復活	1 b 六拍	2 的確	B 1 a 匹敵	
/huku+katu/	/roku+haku/	/teki+kaku/	/hitu+teki/	
規則 1 ↓	規則 1' ↓	規則 1 ↓	規則 1'' ↓	
{hukkatu}	rok+haku	{tekkaku}	{hitteki}	
	規則 2 ↓			
	rohaku		別 格	
	規則 3 ↓		/betu+kaku/	
	{roppaku}		規則 1'' ↓	
			bet+kaku	
			規則 2 ↓	
			{bekkaku}	
1 b 達筆	2 a 日展	2 b 日本	Ca 納得	b 恰幅
/tatu+hitu/	/niti+ten/	/niti+hon/	/nap+toku/	/kap+huku/
規則 1'' ↓	規則 1' ↓	規則 1'' ↓	規則 2 ↓	規則 2 ↓
tat+hitu	{nitten}	nit+hon	{nattoku}	kah+huku
規則 2 ↓		規則 2 ↓		規則 3 ↓
tah+hitu	日 赤	nih+hon		{kappuku}
規則 3 ↓	/niti+seki/	規則 3 ↓		
{tappitu}	規則 1'' ↓	{nippon}		
	nit+seki			
	規則 2 ↓			
	{nisseki}			

表 2 について一部注釈すれば、A 1 b のグループについては、一般には、  
 -ku で終る 2 音節の漢字に八行で始まる漢字が続いても、促音は生じない。  
 例. 薬品 yakuhin, 爆発 bakuhatu, 学費 gakuhi。ここにあげた六, 百, 独,  
 北の 4 字, 特に前二者に続くときにだけ多く生じる。ただ, このグループに

ろく 六波羅、ひやく 百 廃、どく 独 自、ほく 北 風などの例外がある。

B1aの「匹」の今日の慣用音はヒキであるが、ヒキと読めば、促音は生じない。

B1b「達筆」とB2b「日本」の「筆」「本」はそれぞれ中古漢語で *piet, puən* という音<sup>18)</sup>で、Pの無気音で始まっている。(現代昔の拼音方式では *bǐ, běn*。) 日本語でハ行で始まる読みの漢字に、兵、表、報、杯、宝などこれと同様のものが多数ある。従って通時的には基底音として *pitu, pon* とする方が妥当である。しかし、本稿では、現代の日本語の慣用音を基準にして、基底から表層への変化を説明しようと試みているので、それぞれ *hitu, hon* とした。

結局、規則1, 1', 1'' は一音節に続く *t, k* と無声子音に狭まれた狭い母音 *i, u* の消滅を意味する母音削除規則 (vowel deletion rule) で、規則2は無声子音の逆行同化現象を生じさせる子音重複規則 (consonant gemination rule) である。

規則3は、適用される B1b, B2b, Cbにおいて、規則2よりも先に *h* を *p* にする規則<sub>HP</sub>  $h \rightarrow P / \left\{ \begin{smallmatrix} t \\ p \end{smallmatrix} \right\} + \_$  を設けて音声表示に至らせることもできる。

例. 達筆 / *tatu + hitu* /  $\xrightarrow{\text{規則1}} \text{tat} + \text{hitu} \xrightarrow{\text{規則HP}} \text{tat} + \text{pitu} \xrightarrow{\text{規則2}} [\text{tappitu}]$

しかし、無声子音の逆行同化を、資料の A, B, C 全部に適用させる方が自然であると考えて、上の方法は取らなかった。またこの規則<sub>HP</sub>を採用すると、規則2の C<sub>2</sub> から *h* を除くか、規則<sub>HP</sub>を必ず規則2よりも先行させる規定を設けるか、しなければならなくなる。

## 結 語

振り返ってみれば、結局中国から入った *-p, -t, -k* で終る入声音が、日本でフ、ク、キ、ツ、チと母音を付加した読みに変わり、それを逆に母音削除して促音になった過程を説明したことになる。基底の音にしても、ツかチ、ク

18) 藤堂明保, 前掲書。

かキの選択も、-pの設定も、言語学的な操作をへないで到達できている。漢字が輸入された当時、ここに示したような規則の適用で促音が生じたのではなく、入声音からかなり直接的に促音が生じたことが考えられる。表2の音韻変化の過程で、hがhhと並ぶところは、日本語の話し手が意識することのない形式であって、生成音韻論が抽象的で不自然なところがあると批判される例といえよう。

しかし、この小論は現在使用されている漢語の促音に基準を置いて考察している。促音を含む漢語の中、元の入声音に基づかないで促音に読まれるようになったものがある。例えば「圧迫」「圧制」などは、明らかに本来の入声音アフ、apからではなく、慣用音のアツから生じていると考えられる。圧がアフすなわちオウと読まれる漢語が皆無だからである。

今後慣用音から促音が形成される例がふえていくであろう。例えば、「逼<sup>ひ</sup>迫<sup>ぱく</sup>」も逼の漢音ヒョク、呉音ヒキからではなく、慣用音ヒツからこの読みになっている。上の「圧」は特殊な例であるが、他の-pの入声音の漢字で始まる熟語は、今後促音で読まれることは少なくなっていくと予測される。日本人は-pの音が元の音であるという知識をもはや持たないし、昔の正しい促音の読みから時間的に隔たるにつれ、その読みが維持されにくくなるからである。例えば、「納」、「法」が無声子音で始まる漢字と組み合わせられても「なっ」「はっ」と読まれなくて、「のう」「ほう」と読まれるようになり(例、納期、法規)、十<sup>じゅう</sup>歩は「じゅっぽ」と変わっていくであろう。

また、資料の中には、宅急便、鉄管、日展、合衆国、日比のように、現代になって造り出された漢字の熟語が含まれている。漢字の造語能力は高く、今後も技術の進歩、社会の変化に伴ってますます漢字を使って新語が造られていくであろう。そのような新しい熟語に対して、この小論の規則は十分機能し、促音の読みを予測し、また説明できるものではないかと考えている。

付記。本稿は、1978年12月2日第3回大阪外大言語学研究会で口頭発表したものを、大幅に加筆改訂したものである。

1988年6月 沼野治郎：漢語における促音の生成音韻論による説明

## 参考文献

Hyman, Larry M., *Phonology-Theory and Analysis*, Holt, Rinehart and Winston, 1975.

黒田成幸「促音及び撥音について」, 「言語研究」50号, 1966年。

小泉保「日本語の正書法」大修館書店, 1978年。

小松英雄「日本語の音韻」中央公論社, 1981年。

馬淵和夫「国語音韻論」笠間書院, 1971年。

McCawley, James D., *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*, The Hague : Mouton, 1968.

中田祝夫「音韻史・文字史」大修館書店, 1972年。

根間弘海「生成音韻論接近法」晃学出版, 1979年。

大野晋, 柴田武編「音韻」岩波書店, 1977年。

Schane, Sanford A., *Generative Phonology*, Englewood Cliffs, New Jersey : Prentice-Hall, 1973.

藤堂明保編「学研漢和大辞典」学習研究社, 1977年。

ヨーアンセン, エーリ・フィシャ, 林栄一監訳「音韻論総覧」大修館書店, 1978年。